




 刀筆青砥石文
 六

^ 13
 3036
 6止



門へ 13
號 3036
卷 6



刀筆青砥石文あとのいしを寫水箴語卷之六うらまのまんと

江隱

曲亭主人筆削

洛客

櫟亭琴魚原稿

第十套 人心の追難ひとこころ

五十子七郎いそご声高こゑたかくやうやう小云云こゝろと呼よぶ程ほどは中門ちゆうもんの外邊の外よりけりと忘わすれと獄卒ごくそつ

ホ一お兩人に桔槔こけこを被おさるる偽いつはり二郎に且藏かつざうを牽ひ立てた簀子すしの下もと推居おしたり。

藤綱ふじつなつつくく名草劇齋なぐさげつさいのの法師ほふし承う継つををみみつつるる

名なとと呼よぶぶれれ各おの唯の々々とと忘わすれれてて共とも侶りはは額おつつららりり當あた下り藤綱ふじつな声こゑをを激おししめめれれ劇齋げつさい

汝なんぢがが墓はかをを覆おわわすするる彼かの妾めかけ躑つととややんん親おや同胞どうぼうももななれれのの故ゆゑ何なにれれとと保たもつつのの

青砥石文卷六

比より使ゆる又その妻の病臥せしと幾日なり何の症也身ものる巨細より
 比にぞや向まて劇齋頭と權さひ件の磔の側室とあせむ家の目を任せし
 正妻は異物にたよりて正地保人のけだ但木挽坊ある異杜との先婆の通磔が
 親族をたつる里くつるものをも娶りし去歳の冬十月は山伏かかく今茲
 六月下旬六波羅殿の仰より小人筑紫へ赴たつ九月の十日に帰京して
 この比より彼女子の言語忘答常かた乱心くと思へばさる日もあり小人が
 長地旅初を待むより氣の凝りて引かせ病志ありんとせり人か家方の
 配劑と服薬と勧めしどもその性湯液といふ嫌め果敢くあつ用ひ
 とうくほ程は十月某日は一タ更蘭人定まて渠の臥房と潜かかん庭ある

井に陥りて果敢あくなり惜しは渠が送愛の件々を極め歎き葬を
 ぬれおの世の費とせむる越度よとといぬる比廳の地叱りを被てほしく
 後悔つるありぬとや藤綱をちめておれ劇齋目今あらせし如くあつ
 磔が入水の横死をば何ぞ廳の鑑定と請せし葬すると処置あらむ
 てもおほ怯む御定でいへども件の女子が病志の内外の人と食よく知れませ
 その里くつる異杜も異種なく人ば釋氏の律は任せしものとあせむ此らん
 中を燈人多くと陳むれば藤綱かきひてあつてその燈人を抱てあつて
 誰々どと再び問れてさい用意とせむるくつる燈人とおほてあつて只
 小人が後者ある密八といふものハ年来の塾生に彼ものもよく知れのとや藤綱

偽二郎竊に執びしは、曩の河勢向の苛難より杖の苦痛堪されば、さく死を乞ふに云と申しせしむるも、実の彼墓を發せしむるに、行李あり出し、臍物の恨ありめ、所為歎つめ、覺期つるも、あつて況外又何ぞ盗とせ死といひ、藤綱冷笑ひ否、彼墓の發せしむる外に盗し物ありん、又後は穿鑿せん、且藏の又冤屈を叫べど、これ燈扱の鏡ありか、くも脱る路ありやといひ、れて且藏頭と搦小人、藤白よりかへるさま、途主の金と奪れ、且蓮華院に赴き、寺内を迷るるを拾ひ、寔におもひ死越度、かれも彼女子が死せしむるも、その夜あるゆひは何ぞ墓を發せしむる杖の苦痛、霎時の程の死後の悪名、比まかぬ、忍ぶくじ、びく、遍向せしむ

〇盗ま 〇盗ま 〇盗ま 〇盗ま 〇盗ま
 とも盗れり、あり盗ぬ物と、盗りしは、ゆり、藤綱ゆき、
 嗟嘆り、且藏あり、陳、賊、燈、墓を發せしむる、
 且くあり、誡、汝が金と奪ひ、賊を捕へ、
 ありん、七郎、彼奴と、縛り、下知せ、
 蜜ハが利腕楚と、扱揚れ、駭忙、
 覺あり、人、と、果、推伏せ、
 當下藤綱案を、搦遣り、賊奴、
 と、高、呼、阿、と、
 追立て、外面より、
 追立て、外面より、
 追立て、外面より、

青砥石文巻六

〇三

同類かのごとくあれは何ぞさう陳べん。さうもせと氣色さう貫子の下の中
浅羽十郎縛の糸引絞り速に首伏せぬ背を割骨を摧んかくても汝ハ
おもうとびやと腕直と掃揚れハ蜜ハ苦痛堪どく面を皺め身を及
阿那苦一息を絶れや六六且く後々あひと泣つて勸解く膝打布地薬中
既ハ搦捕れく露頭のうへ脱れがう現被りのがおもせし偽りの小入日
あまの愛妾磔をあひを運しく口説ありが渠ハ只強顔のまゝ本意は遠に
ある小前月某日真夜中比夜被女子ハ井ハ落て身ありが人ハあつたぬ心の
哀さうもあつたかた送葬せし甲夜ハ劇齋竊ハ小入と閑室ハ招
よせ汝ハあつたあつた旅宿の苗守の程阿磔ハ偽三郎といふのと密通月日

累う彼偽三郎ハ汝ハあり蓮華院の食客之ま如此の證據あり許は汝奴
原ハ終に海外聞と顧て怒とせあつたあつた夜も阿磔ハ教訓をうらうバ
渠ハさうさう羞うけん忽地非命ハ終と取れり今さう不便ハあつた憎ハ死ハ
偽三郎ハ官府へ許ありと怒と復さんと欲せれば暗死恥と明はの所詮
竊ハ陥れ官府のまを借りと這奴を救はよおまか。その謀ハ箇様々
如此くと其は下ハ汝ハ豫て知まらう蓮華院の薬中とされ日工あり
は押着おの潜や小渠と相譚副中ハ為課せよ努人あつたをさう遠
つあろとゆさくハ沙金四五兩遞与されう小入ハ阿磔ハへんくを被る小
彼偽三郎奴ハあつた密通せしとすやう婿たし限りあつた胸ハ浅間の獄を

青底の文

燃るが火憤りの後の祟とかへり。異機もく兼引て馳て蓮華院は走り
 火竊は葉中と誘引中と遠く四條の酒樓は起死渠も飽も酒を盛り
 られも飽も飲食と彼密計と説示一相障深せと相共は酒樓とゆれば時
 刺しよ。子三刺の比まゆぬか。三條も来る程は葉中が町家の檐下の
 桶は小便垂るを待と。於ほりよ立在る後方よりあるものあり心も
 あら。月影あつくと透しえれ。その人へ別人か。この年来睡し。同塾の
 且藏が藤白よりかへり来る。既解らる人れば。這奴字向と鼻よりけく左
 右もれと悔る面と又さけゆま。脅して遊んとゆへ。葉中は其は町一町
 かり遣り過し。前後より走のかり引倒さんと胸前と捉る。進と懐る。

財布と傾し引せと奪取し。足跡と暗し逃と死か。葉中共侶は
 蓮華院は起死。財布の金と揚るる。沙金拾五六両あり。その中四両は葉中
 分與へ。三刺の比墓所より死て阿珠が柩と掘り死内は飲り。衣裳調度と
 送る。引せしつ。小鏡と鼻紙挿と石畳の邊に捨。或ハ又偽二郎が部屋
 外面杭根の辺に捨。葉中と共に彼部屋の籬芭の破れより窺へ。ハ
 裡面は燈火幽ゆ。障子と半開たる。ほりよ一箇の行李あるもの。
 その時。偽二郎は引せしつ。身と起。く外はゆ。手は物蔭を避。解れて
 且く葉と遣過し。何処へゆく。飲と目送れ。墓所のく。起たる。この際。
 と其はあ。葉中と外に立在。小入の裡面に入。る。行李を推ひ。死彼棺

中より出て来りて。衣裳揃等をどと底のこまに推納れり。故の如くも覆ひし儘の
 如く索を被りて遠く走り出。藥中共侶彼寺門の守屋を退り餘り衣の
 藥中より且秘指と預けつ富巷路をか程は八声の鶏の數鳴ぬか。その
 詰且蓮華院より使僧来て云云と告ぐ。小人の劇齋は俱せられ。寺に
 赴た外面を成る打ち。食堂のほとり不且藏が困り果る面色してかれ居る
 と訝し。當一當て事情を。あつとあひり。大庭は渠と捕へる。懐あり
 昨々を捨り。小鏡の頭れ。半の意外の幸ひ是奴も賊に陥れ。奪ひ金の
 後吐患と尋思は声と仰り立て罵り。又引捐り。客壇へおのり云云と
 告ぐ。小人劇齋も亦云云。がよ意は協ぬ。且藏かれ。事は虚実と云ふ。偽二郎と

同類の濡衣と被せり。又且藏と劫と奪界。彼金の酒の為は用過し。と云
 一銭のいふ。を。罪惡今。後悔の甲斐。あつと云ふ。あつと云ふ。あつと云ふ。
 皆是主人は分付られ。推辞。所の所行。余が。助け。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
 解れ。茶中も亦。晩。今。蜜。首。伏。毫。む。り。り。小人の劇齋と年
 来の別。跡。あ。つ。比。彼。人。は。唯一。雙。の。草。履。と。賣。て。方。銀。一。片。惠。れ。る。
 是。頃。より。く。疎。り。た。サ。の。も。密。八。は。その。り。れ。相。共。は。彼。新。墓。と。費。た。り
 一。命。と。助。け。を。あ。人。と。の。葉。く。の。い。を。あ。人。に。藤。綱。の。可。と。う。ち。笑。ひ。は。茶。の。此
 露。頭。よ。及。び。谷。と。攘。り。く。の。頭。と。迷。れ。ん。と。あ。思。ふ。よ。再。び。多。言。は。ら。と。あ。れ。

あつた。禁之偽と云ふ。これに且藏は罪なり。傳と解せしむ。五十子
七郎の首と獄卒ホト傳へ。柵指傳の索も釋る。天の冥福よ。心死下司も
みか。只顧感嘆あり。この死も劇齋の只平伏せり。藤網を信と
え。奸賊劇齋頭を奉よ。汝の心葦くも偽二郎を陥れ刺このと。來隨從
せ。且藏を誣と殺さんと謀り。その殘忍甚し。蜜八があせし如く
姦夫の恨より。偽二郎を謀り。殺と問れ。やを頭と擡憲断の灼
然。密謀あり。これに罪と脱す。あれども偽二郎が密通の證據
分明。渠が自筆の詠草の硃が護符。裏あり。この故。あつては。硃を教
戒せり。慈悲あり。仇あり。被妾の自殺せり。これ亦共侶を走らる。

いと恨る偽二郎が所為なり。とせり。訴あり。是非を憲断する。死の
外聞を脱す。謀り。云云。巧を。あつた。怨り。やとくも
わ。これ入り。飾を藤網冷笑ひ證據の蹟。何処ある。とく
え。劇齋の懐中。置紙を擡揚り。廻これ。と回報せり。
さ。五十子七郎。け取。て。茶。左の。進。藤網
業。の。偽二郎が自筆。せ。この期。及び。偽り飾。を。醫生が
あ。これ。と。あ。西國。より。歸京。の。翌朝。偽二郎が。揚枝
番磨。より。姦夫。を。察。し。の。後。下女。の。匙。を。威。し。硃。が。奸夫。偽二郎
あり。と。定。これ。を。知。る。死。是。追。り。偽二郎が。硃。を。贈。り。詩。奇。と。初。

竊見らるんもの折匙を劫引ゆき鴨河は突落し還る匙の逐電せし
とこの母異社を召よる時日を限る邪怪の催促ぶのひをいひあはせ
残毒どりと推せ六磔ども汝が竊殺しと井に沈め疑ひやかともあはせ
幸て水火の責をいひたしつゝ明の肺膽をさぐりい富れと劇齋の
唯と心よりよかへぬと肚裏よあはせこの人四聴八達の方識ありとせよの理言
あはせりり匙と磔とを殺せりる密入せりあはせりりあはせりり知られんあはせりり
死入よ言やと推量といわれ偶中あはせりん脱走くハ脱れどもとあは
くく曾推鎮り所擬でいふ心人の心と磔と殺せん況匙と鴨河へ推沈せり
恨あはせりり身よりあはせりり果は礮と疾視不敵の癖者あは
る

偽らば浅羽十郎彼めいどとくよと下知されが用意をあらうけん中心のや
も既し牽を置りり匙が帯は縄ど加て一個の獄卒れと牽立との母異社が
左右の腕と歩卒兩人會押へる實子の下は並居れば劇齋のめ胆を冷し魂の
身は添は慌れぬと立んと藤網へいれとあはせりり彼待りよと
声どかれが五十子七郎横膺拂く實子の下へ筋斗し地響はるも投降せり
浅羽十郎衝と寄せく忍地索と被せり藤網再び倍と疾視劇齋かとも
偽飾あはせり上洛のそめり長時朝臣の密意あり汝が許の趣と勘察と
偽りあはせりもあはせり五十子浅羽の西光黨を汝が近鄰は遣し
彼磔が保人ハ杉木挽坊あはせり異社に且その異社の汝が家の炊妾匙が母と



立て官府沙汰に及ぶも勝を取るとかろん毛と吹た疵を求人より且く渠を
 隠し置け時宜よりとくもかくも又せん志のあつたやとあひ入しく借やうよ
 やせ相識柴賣許憑を匙と遣しつゝ。親身はるる渠が往方の絶て
 ちを偽りく勸解つて日と過は程は阿碓へ夜深に井に落ちて身あうぬを
 告りては原來彼事發覺れて脱す路のあはれはよ自殺多し痛し此よ
 多への影獲くてもの極きえも送り病は假托疎遠しく又ひむくの
 日と送ればあひひあくろ殿がこの問注所へ召させれば彼條の二五と問せあふ
 脱れくて遠くちあげく哀しく夫背へ遣せし匙を召捕られくちや場
 ちを牽れぬとも人のあつと人のあつと恨と愛と可愛はるる女兒小とといひけし目と

拭へ奸智は長る劇奇は竟は偽の路絶く今かかとあひけん觀念の眼を
 せやく浅羽十郎より対ひ小人一時の愆やく人と損ひ身を成し後悔あよ
 ちを嚮むちあけく恩愛正妻は異あつたり側室を竊れ恨太
 ちを極小人年来廣言くちや人を欺くとも人のあつとを欺れどいつひつよのふ
 奸夫淫婦の罪悪と明く地を正せたる第一番は小人が世の胡慮はありぬ
 べしこれ又這奴小と欺れ後くこの憤りを釋んどもとあひよけれを
 告る匙と鴨河は推沈めつ渠が口あり漏れどとありその後蒙汗薬を碓と
 酔く夜竊は逃る車井は投入する更は奸夫偽二郎と陥まん計りよふ
 蜜八葉中よがもせし如くあれども件のあつた女子どもと害せよ腹心ある

蜜ハまきりあせざりし小尉の殿の藤綱の聰明あるを以て異社母子を捕へく。ミダ
 密策とあせあひ鬼神不測の業驗とあらまふかこころべし死せりとあひ
 匙ハ生て渠あり事の頭れぬま誰と恨んすもね。あつてあつてあつてあつて
 首伏あつてける藤綱これとあつてて劇齋が首伏甚遅し汝ハみづろ賢ことして
 恨と飾るの故は羞と感あつて罪とゆへ入は恨とあつて身と縛の索と被と
 羞められ大かんと且医ハ仁術ありあつて不仁とみと人と害と謀りしハ
 抑何のありや又汝が各番ある長旅の留守の宿と女子をとりし任せし被ば
 奸夫と引入れて忽地家を倒せし至れり言葉巧み非と飾りて衆人を欺たり
 とも日月と共に隈多く暗さと照らあつて官府と欺れぬや嗚呼の白物と

叱懲りて又つりいどをまきりし偽二郎と呼くれが獄卒間近く牽きたり
 當下藤綱ハ劇齋が進せし詩歌と再び讀之くとこれハ汝が跡致と問へば
 脚錠の如くと答ふ藤綱はまきりてあつて趣甚違へり汝ハ墓と覆せ
 とも外に盗一初めあつて嚮まこれ訊て盗せしやとせり旅せし人の
 宿と窺ひ隙隙を鑽くその妻妾と密通し且暮よ人の飯を食ひ且
 暮よ人の酒を喫よ人の臥房とまが臥房とて遊戯まこと三ヶ月これを盗
 賊といふべし死や汝ハ人の側室と竊し又人の酒食と盗しその居宅を竊し
 ぞりハ一朝の賊よあつてその罪墓と覆しと絶く軽重なれり之無慈悲の
 癖者かと叱懲せ偽二郎ハ理は伏し返り辞ありけり且と頭と撞密通の

り露頭あせのうへへちりし罪つみの大おほいをあれされれ小人せうじんの彼女子かのむすめと宿縁しゆくゑんあり。
 七年しちねんむより前まへつ冬ふゆ小人せうじん鎌倉かまくらは旅たび寝ねせ宵よ云い云いののみ有あく鐵てつの觀音堂くわんおんどう也。
 阿あ碓すい枕まくらと並ならべる女子むすめの阿あ碓すいかたの男おとこ七月しちがつ十日じゅうにち阿あ碓すいが蓮華院れんげえんは詣まゐり折をり。
 それとあはれ春恋はるこひより千々ちぢぢよ心こころと碎くだれやうなくよ本意ほんいと遂つひく昔むかしと語かたをバ
 舊縁ふるゑんと再びまたとよ結びむすてあは天縁あまゑんとあひひつともりか渠みちも苗なむれ。
 七月しちがつの中なか幹かんより九月くがつの中なか幹かんまで名草なぐさが宿所しゆくじよは潜ひそびてもりあトグ帰かへり
 京きやうの信しんは敬馬けいばを眺ながめて又故またの寺てらへり去さり後のちハの鳥とりの翅はねも絶果てつぐわて冥土めいどの鳥とりと
 ありあはれ情婦じやうぶの送葬そうざう外ほかの心こころの哀あはれとやうもあはれありや夜深よるふかはゆくその
 墳かみは立たちありしくバ忽たち地ぢまの雲うみは浪落なみおちく衣裳いさうは粘ねり壤つちえは殺ころす齋さいが

詭計けいけいと資すけいはれぬくも怪あやしくも唧さくも陳ちんれば藤網ふじあみ坐まて声高こゑたかやふ。
 愚ぐあらうら於お偽いつはり二郎にらう縦たて舊縁ふるゑんあれがて人ひとの妻妾さいせつと奸通けんつうとそハいひまたま。
 ありきやこの詩歌しうかハ亦何またなにの為ためは磔はりつけは贈與くわんぎとこれハは詠草えいそう秋あき詩しといひ又
 歌うたとのひありゆけは詠えい詠えいあり故ゆゑをあめめのうらむとと問とれて竟は應答おたこたへ。
 初はつ小せう蓮華院れんげえんは寄宿きしゆくせした向後のちの吉凶きちかうをしるを観音くわんおん藏ざうと拈ねん拈ねんは
 即第三籤すくわんとゆえとハ彼藏ざうの詩句しきうのく愚ぐ詠えいのくたらのち箇様こくさうとれ
 子こ小せうあり阿あ碓すいと邂逅かいごせ折をり彼藏かのざうの句くを業わざはは蔽衣へいゐ云い云いの氣轉きてんの三句さんきう時ときは
 取とりま當あれり又臨水りんすい不可い濯たく遭ありし初究研しゆくきうけんと示しされりハ水の漏もれを堅かん
 妹い使しの契せきりせ結むすぶは死し前まへ象さうかんとあひひふと憑たよりくは死し又また和歌わがハ初小せう人ひと

前式二〇八六

一五

鎌倉の鐵の觀音堂より。阿彌と挑し夜腰刀は附けし山鷄の
 鞆脱て渠が懐は落ゆり又渠は濁水の井をゆり落し人かまはるるかて
 夥の年をく彼再會せし夕あまのの首密合し情愛の浅くは阿彌
 今茲も件の鞆を失ひ紙は捻りて秘蔵せし紙は虫糞掛りて一首の
 歌と流しし小人の歌のありと定まらひゆれども歌ハ素盞雄尊の八雲
 川出雲八重垣よりありしが夫婦はあはれ祥よとて人か憑くゆひふ
 ありしが歸京の報知は驚死猛り別去んとせし死彼虫糞の歌ハ滅く舊の
 白紙はありし阿彌ハ怪疑多く放遣する忍びゆれども誓紙を求めたが
 小人渠を慰めく彼鞆の白紙は云々の詩歌と写し誓紙はやく取らせしあり。

又別をせし前夜は小人奇の夢をよきり壁の磔と小人と鐵觀音堂は臥すに
 首觀音の頭顱忽地は俗髪よりありの面影小人は似るゆへかくてその頭の顱ハ
 けづる軀は續て全體具足は拜れぬを又忽地は散碎く水とあり。
 流れて跡のありありの怪死夢れども夫婦ハ一體分身し軀はそれハ
 頭顱小人は肖さをめめて全身具足と見えし阿彌と飽別とほむ程
 何れ相合く夫婦とあはれき祥あるその水はなりく失ひハ今の煩惱を流し
 歡びと迎る祥を彼れ占しこれ占しゆの憑くゆひよみ空をゆひゆれが
 藏し善夢も人迷りのものなりと曉れが悔しきと又ハ藤綱あはれ感へる
 つか惑へるか恥とある白徒はよみ解示さんハ再益かきと色を好む利は耽る

世の為許人よとこひやくしんが蔵くらの為ためにならなれりとしては聊論りょうろんになるる劇げ齋さいのおもし知しらしや
 汝ながい旦たん惑まど溺ぼくせり礫れきが素生そせいと尋れば廻まわりて汝なが兄と言えし嶋しま影かげ屋や湯ゆ治ちが後妻さい
 水石みづいしといひし濛もう婦ふあり件の水石の鎌倉の破落戸ぼらくこ佐さ栗り平へいが女児こありと湯ゆ浸ひ
 借財かりざいの代として理ありこれと要りし小こ蘆頭あしづ吉きちといふ無頼漢の水石が密夫のま
 より又七なな竊ねづは誘引より走まとりてくありて鐵觀音堂てつくわんおんどうの辺に追隊おのり
 ぞよ追お詰とめられ蘆頭あしづ吉きちの傷ありて詠えいの庭に牽れり觀音堂くわんおんどうを偽三郎ざぶらうが
 圖ずに水石と犯せしもの宵よのまであんどんといふ劇げ齋さい駭さい然ぜんる眉と
 擲なり嗟嘆たんしる原はら来き阿あ礫れきの兄の離別りべつせし妻つまありる軟か弱じやくのはことぞり小
 羞はる回答たうたとせりる藤ふじ綱つなのこもとと又偽いつはり三郎ざぶらうの對ひ汝のこもとと

この薬中ハ當初とうしつ鎌倉かまくらを追放おせられ水石みづいしが密夫蘆頭あしづ吉きちの面を撲傷ぶつ
 られと入いりて交まりて彼かを流浪りやうと近比ぢひ都とに赴りて蓮れん華げん院いんの守りを
 生道せいだう人にんよりなりる形かたちを改めて讚さん佛ぶつ場ばうといふ宵に夜敷よに調戲てうぎせり
 心こころも醜き顔の瘡毒そうどくにありて形かたちのまで鬼畜きしゆくと等しくなりしの薬中ハ鎌倉
 へ辛く竊せり水石みづいしと偽三郎いつはりざぶらうは犯される且かつ彼か礫れきハ水石ありと夢ゆめ中ちゆうに死
 ぬるといふ劇齋さいが悪すり與よりて其その墓はかを覆りし水石みづいしが罪障ざいじやう重じゆうたり死し
 後ごと又ども天あまが免され故この密夫衣いを剥れし其その尸しかを曝れし抑おさめして日を恥
 亦またこれより大おほきなし礫が水石ありし異い村むらに問究もんきゆうせり其その実まことを知りて又またいふ日ひ小
 藥中やくちゆうと擲捕てつして熟じやく視しれば彼か蘆頭あしづ吉きちは似たりしより素そ生せいと責問せきもんせしにこら

〇戒めあへぬ。〇迷ふ。〇吉祥とあり。汝あがや観音籤は蔽衣又
 〇莫後深著欲相像とあり。鎌倉のく其法。〇水石と悪縁と結ぶと。
 〇制せあへぬ。又臨水不可濯。遭破初究研とあり。水石の礫ハ劇齋は井よ
 〇落されく死するをいふ。あれどもこの怨と雪とをかあべく。〇より濯ぐべ
 〇く。〇破はあか。〇破ハ則れ。〇青破はあか。〇究研と衆悪凡礫の碎
 〇く。〇各密を研頭され。〇等く罪は伏し。〇又虫糞の歌とあり。〇山鷄の
 〇愚なり。〇水はみ。〇水が。〇張華が博物志より。〇こと
 〇わ。〇山鷄の毛色の美れを愛する。〇終日水は映。〇去ら。〇目眩は枝
 〇より落る。〇軀は溺死する。〇女は亦是の如。〇色の為。〇身は忘。〇後。〇禍。〇事。〇を。〇あ。〇は。

〇還てこれと吉更と。〇聊も怪る。〇詩歌の。〇解ゆる。〇博士の。〇判断を
 〇べ。〇元は謹慎の義。〇疎け。〇心を師と。〇當否と。〇彼詩歌の示現。〇あり。〇
 〇初。〇山鷄の片靴と。〇濁水の弁と。〇交易と。〇色。〇漏れて。〇命と。〇喪ふ
 〇戒。〇ゆる。〇足。〇行。〇彼。〇鳩。〇影。〇屋。〇湯。〇治。〇徒。〇亦。〇是。〇名。〇詮。〇自。〇性。〇中。〇鳩。〇と。〇分。〇て。〇山。〇鳥。〇之
 〇水。〇石。〇の。〇水。〇は。〇影。〇と。〇ろ。〇く。〇漏。〇れ。〇て。〇命。〇と。〇預。〇せ。〇る。〇往。〇れ。〇あ。〇る。〇人。〇の。〇為。〇は。〇詳。〇評。〇し。〇る。〇是。〇は
 〇无。〇益。〇の。〇辨。〇を。〇れ。〇も。〇汝。〇亦。〇無。〇明。〇の。〇醉。〇醒。〇び。〇み。〇つ。〇罪。〇を。〇成。〇く。〇刑。〇は。〇就。〇ん。〇す。〇不。〇便。〇と。〇す。〇と
 〇言。〇俗。〇は。〇通。〇ぜ。〇る。〇と。〇か。〇一。〇寸。〇寧。〇又。〇後。〇記。〇憶。〇し。〇て。〇恐。〇謹。〇し。〇後。〇護。〇ら。〇豈。〇罪。〇人。〇と。〇か。〇ら。〇す。〇
 〇あ。〇ん。〇や。〇君。〇子。〇は。〇も。〇の。〇境。〇は。〇入。〇る。〇國。〇の。〇大。〇禁。〇を。〇向。〇か。〇と。〇も。〇の。〇あ。〇る。〇は。〇奸。〇詐。〇を。〇慾。〇と。〇慾。〇中。〇し。

國家の法度と忘失して傲倖と樂ひん。抑亦愚かぢや。されば鎌倉なる鐵
 觀世音の佛像不具中々首の全し。大慈大悲の方便一切衆生造惡の因果と
 天罰と均免れど五刑との身も當り死首と軀と所を異中とす。あやうの如くすと
 示さん為は斬首の像と末世遺は首觀音のその堂内は薨り。夜の女子と理の
 引入れて。流瀝の汚穢とせしむ。惡行今年と累ねて改過懺悔の念を。法
 首の軀と去り。かくのどくわんと。夢中の示現よあんどん。その水とありて
 失せし。あやうの。あひぬれども。その傲倖の譏あり。又劇齋へ去歲の冬
 清水の舞臺にて。扇とち落し。磔が笄と折り。件の女子を。あひ
 する。遂に娶りし。ものと異は異社が。あやう。是も亦觀音の靈地よ入て恭

信あり何処のもの。識ざり。淫婦は懸相せし。そのあや穢れなり。是之神仏は
 詔りの花の春紅葉の秋。或は縁日の開場と宗と。深信のあや。あは百遍
 千遍あるとも。豈神佛の眞加あんと。や。その地のが。慙よ迷て。是は云云の示
 現。あは。彼は云云の前象あんと。や。勝は。あは。其は。あは。凡夫は。あは
 智恵の天賞罰の國家の樞機。汝は。あは。その罪あり。偽二郎薬中劇齋
 蜜は。あは。亦主の留守は。奸夫淫婦の執持。あは。その罪。あは。是は。あは
 共は首を刎死め。異社の磔が不義とあり。その保人の故と。劇齋が。あは
 忍のゆゑと。許む。怨と共。是を隠く。月。あは。これ亦免れ。あは
 ざるもの。あは。京都と追放と。大約。これらの赴。あは。六波羅殿の沙汰と。あは

あつた事と云ふに。○ま。ひ。ふ。あ。の。お。つ。を。り。あ。り。ま。か。つ。た。事。の。如。し。皆。こ。の。旨。と。兼。れ。と。嚴。に。捉。し。て。罪。人。の。意。と。さ。り。ふ。○
齊。一。慚。愧。後。悔。と。額。つ。ら。ら。佇。立。ゆ。ゆ。と。れ。ハ。淺。羽。五。十。子。ハ。當。座。の。士。卒。ハ。
藤。綱。の。才。幹。智。辨。と。賞。嘆。し。て。共。に。呼。ぶ。を。感。じ。け。る。

第十卷下 淑人の吉祥

當。下。熊。野。且。藏。ハ。あ。り。進。む。と。藤。綱。ハ。稟。上。り。御。憲。断。の。灼。然。と。さ。り。○
寛。枉。忽。地。ハ。氷。解。し。て。赦。免。を。被。り。ま。り。○。あ。の。お。死。歡。び。も。也。と。劇。齋。ハ。こ。の。
年。來。小。人。が。師。の。主。に。被。入。犯。せ。る。處。に。あ。り。誅。せ。れ。は。い。は。あ。ら。う。め。の。誤。信。て。
且。藏。ハ。命。と。し。ゆ。○。師。の。惡。を。と。頭。と。す。め。が。標。榜。と。脱。れ。し。と。風。傳。せ。り。
れ。ハ。打。と。し。し。○。且。小。人。ハ。官。府。に。對。し。て。さ。る。罪。を。い。は。せ。し。主。の。金。と。



盗。と。し。て。これ。を。贖。ふ。ら。う。と。な。れ。ハ。劇。齋。ハ。對。し。て。その。罪。を。い。は。し。し。和。漢。の。
先。蹤。を。尋。ね。し。て。その。子。ら。の。その。臣。の。或。ハ。親。の。罪。を。代。り。或。ハ。君。の。死。を。償。ふ。と。
今。も。忠。臣。孝。子。と。し。り。○。あ。れ。小。人。と。罪。を。せ。ぬ。劇。齋。ハ。死。を。宥。め。ぬ。と。い。ふ。こ。の。
之。の。兒。慈。悲。を。ん。と。名。ひ。し。て。願。ひ。し。藤。綱。は。て。頭。を。さ。ら。掉。り。て。所。願。神。如。れ。
○。奸。惡。の。を。赦。し。て。良。善。の。め。を。殺。す。ハ。國。家。に。政。道。立。た。ぬ。被。周。の。時。魯。の。
直。躬。が。その。父。の。惡。を。許。さ。ず。父。の。罪。を。代。り。と。願。ひ。し。辭。を。と。り。只。名。を。取。り。と。欲。せ。し。
○。解。示。せ。し。如。く。大。九。の。件。の。枉。津。日。ハ。嶋。影。屋。陽。治。ハ。起。り。て。弟。劇。齋。ハ。
盡。く。積。惡。の。家。餘。殃。あり。と。い。ふ。○。彼。湯。治。ハ。徒。ハ。あ。く。名。詮。自。性。あり。あ。い。又。
あ。の。の。要。を。今。さ。う。又。ハ。劇。齋。ハ。奸。惡。も。亦。名。詮。自。性。と。い。ふ。○。故。に。あ。の。

三十一

いかに死病のうらみありとぞき、是の名詮自性これ之渠幸ひやとい、奸淫の家い、
 仕へばあ、豈罪人あとありとわん一期あを要異あ、過定あ、死あ、不覚あ、悪あ、つあ、ひあ、
 人あ、をあ、活あ、しあ、人あ、をあ、殺あ、しあ、是あ、のあ、匙あ、をあ、所あ、以あ、りあ、又あ、異あ、社あ、とあ、守あ、宮あ、とあ、和あ、訓あ、同あ、俗あ、よあ、
 守宮あ、のあ、霜あ、へあ、媚あ、薬あ、はあ、奇あ、效あ、ありあ、とあ、異あ、社あ、婆あ、とあ、似あ、りあ、渠あ、長あ、舌あ、多あ、辯あ、かあ、とあ、
 好色人の心を動し、街妻側室の媒妁と結計とるものかん、あつとゆく
 劇齋あ、のあ、碓あ、とあ、薦あ、りあ、匙あ、をあ、使あ、りあ、一旦あ、その利あ、をあ、ぬあ、れあ、ばあ、遂あ、はあ、禍あ、をあ、脱あ、しあ、
 媚薬と揮被て劇齋と惑せし、異社の守宮あ、とあ、俗あ、のあ、胆あ、のあ、字あ、とあ、相あ、よりあ、熊あ、之あ、膽あ、臆あ、
 野あ、のあ、字あ、とあ、之あ、のあ、字あ、とあ、和あ、訓あ、おあ、があ、且あ、とあ、俗あ、のあ、胆あ、のあ、字あ、とあ、相あ、よりあ、熊あ、之あ、膽あ、臆あ、
あ、とあ、只あ、奸あ、惡あ、れあ、のあ、おあ、があ、あ、熊あ、野あ、のあ、人あ、氏あ、中あ、にあ、熊あ、野あ、且あ、藏あ、とあ、俗あ、稱あ、をあ、
 野あ、のあ、字あ、とあ、之あ、のあ、字あ、とあ、和あ、訓あ、おあ、があ、且あ、とあ、俗あ、のあ、胆あ、のあ、字あ、とあ、相あ、よりあ、熊あ、之あ、膽あ、臆あ、

熊胆あ、りあ、亦あ、是あ、名あ、詮あ、自あ、性あ、とあ、いあ、へあ、熊あ、のあ、膽あ、のあ、味あ、ひあ、甚あ、くあ、苦あ、れあ、ばあ、蛇あ、とあ、
 征あ、てあ、疖あ、をあ、破あ、りあ、鬱あ、とあ、ひあ、れあ、毒あ、をあ、解あ、せあ、その效あ、枚あ、奉あ、るあ、はあ、違あ、りあ、素あ、りあ、人あ、参あ、とあ、
 伯仲あ、しあ、くあ、諸あ、薬あ、のあ、巨あ、擘あ、とあ、りあ、こあ、多あ、能あ、かあ、くあ、毒あ、のあ、胆あ、のあ、且あ、藏あ、があ、氣あ、質あ、これあ、
 似あ、しあ、りあ、りあ、劇あ、齋あ、があ、意あ、はあ、協あ、しあ、をあ、諫あ、言あ、耳あ、はあ、悖あ、ひあ、飲あ、良あ、菜あ、口あ、はあ、苦あ、地あ、のあ、謂あ、こあ、
 惜あ、しあ、りあ、れあ、且あ、藏あ、もあ、亦あ、人あ、とあ、ああ、りあ、世あ、はあ、名あ、医あ、ハあ、少あ、くあ、ぬあ、はあ、をあ、年あ、来あ、奸あ、曲あ、あるあ、
 劇あ、齋あ、はあ、隨あ、後あ、あるあ、汝あ、のあ、姓あ、廉あ、直あ、かあ、れあ、ばあ、奸あ、邪あ、の家あ、はあ、仕あ、へあ、くあ、偽あ、深あ、せあ、れあ、
 殃あ、危あ、をあ、取あ、れあ、りあ、譬あ、バあ、主あ、のあ、金あ、とあ、畧あ、奪あ、れあ、てあ、身あ、をあ、鴨あ、河あ、にあ、投あ、んあ、とあ、りあ、又あ、蓮あ、華あ、院あ、
 わあ、くあ、寺あ、内あ、にあ、送あ、らあ、小あ、鏡あ、とあ、りあ、ああ、げあ、るあ、皆あ、是あ、湯あ、治あ、ガあ、初あ、惡あ、心あ、のあ、類あ、をあ、引あ、くあ、
 山あ、鷄あ、のあ、水あ、鏡あ、はあ、因あ、縁あ、ありあ、さあ、づあ、こあ、のあ、心あ、をあ、ぬあ、絶あ、てあ、邪あ、死あ、とあ、りあ、神あ、明あ、仏あ、陀あ、のあ、

擁護ようごよりく欣幸きんこうして脱れだつり水石みずいしの磔はりが井いに落おれたる匙しが鴨河かみかに投なげ
入いらるる皆山みな雞けいの影かげは寛惚かんぼつく禍わざはひを執とるは似にたりなりとと解とけしけば
且藏じざうあつ感佩かんぱいくくわあわあくくももるる尊教そんきやうをかへかへなるなるもも似にててもも恐おそくくは
ども小人こじんの幼少ちようせうより孤独こどく赤貧せきひんのゆゆににてて負おけけの資しあるあるををわわりりてて師しと
擇えらぶぶの餘力よりのちからは死し且小人こじんがが字じぶぶ所ところの衛生えいせいの技わざのの儒学じゆがくを受うけけるるががねねば
師しの心こころををいいたたれれかかるるもももも医術いじゆつががよよ技わざ尋たづねねるるがが事こと足たりれれりりとと思おもひひ出いでで既すでに
中ちゆうてて療治りやうぢのの人ひともも年とし来きた認とん做じひひへへババ恩義おんぎををととままるるがが愚意ぐいはは疎畧そりやくののい
りりどど劇齋げつさいがが意いはは協きやうぞぞいいくく憎にくれれひひのの茂水しげみづのの合あははりり所ところ致いた身みをを責せむむははららししめめるる
いいつつりり人ひとをを恨にくみみ死したたるるのの故ゆゑははそのその罪つみをを代かへへりりとと願ねがひひ之の名聞なもんのの為ためににああららははすす

御許ごこころ容ゆるみみのの幸さいひひかかんんとと再また々また煩わづらふふ企望きぼうハハ藤綱ふじづなももくく嘆賞たんせうしてして霎時しやくじ頭あたまをを
傾かたけけのの後あとはは松栢しょうはくのの標しるしをを知しるるととはは汝なんぢがが志こころざし操さうハハ賞しょうににべべしし。ああれれはは願ねがひひのの心こころをを
これこれもも旨あじわわれれがが今いま試たまはは汝なんぢをを用もちひひんんこのこの六波羅むつぱらのの獄舎ごくしゃの中なかにに囚とらへへ七なな人にん重病じゆうびやうにに
ああるる死しのの中なかをを生なますすももああららぬぬののああららととぞぞりり汝なんぢ彼かれれをを療治りやうぢせせよよ功こうああららぶぶ必かならず賞しょうせんせん。
ああくくせせよよかかとと命いのちどどくく且藏じざうははこのこの日ひよりより休やすみみ所ところをを賜たまははりりてて六波羅むつぱらのの館たてにに
留とどめめ劇齋げつさいハハ五ご人にんのの男女なんにやのの舊ふるののごとごとくく獄舎ごくしゃにに繋つなががれれてておおんん下げ知ちをを疎そべべとと獄吏ごくしにに
旨あじととゆゆととせせてて更さらにに蓮華院れんげゐんのの役僧やくそうをを召まひひつつけけ劇齋げつさいがが妾めかけ磔はりハハ原是げんぜい枉死かうじのの
ののああららはは浮屠家ぶとけのの律りつははああららとといいふふももそそののああららはは葬くわむりりハハ尤なほ住持ぢゆうぢのの越度えつどありあり。
ささびびとと劇齋げつさいがが奸計けんけい發はつ覺かくれれるるがが格別かくべつのの譏ぎををああららししめめるるががそのそのああららはは咎とがりり退ひりり

此の如く懲りて裁断せしむる果はけり。かくて幸々との免さるる暇もあらず。
 藤綱の廳より罷りて長時朝臣は對面しつ。梓送もあらず。告ぐ。長時朝臣は
 感悦しく款待せし。浅くは。劇齋偽二郎は誅せし。と。その事
 ぞ。不時の赦を被りて死罪一等と降され。速に嶋峯に流されり。
 これより先は鎌倉の將軍頼朝朝臣の故ありて職を罷られ。建長後
 嵯峨院の皇子宗尊親王と征夷大將軍は拜仕し。鎌倉へ下されり。
 此の事。前攝政藤原兼經公のむす女と執權北條時頼の養女と。北の
 方を備ふ。かくて件の北の方この時懐妊あり。既五ヶ月及べり。安
 産せし。祈の爲京鎌倉に赦せし。輕罪人の放され。重罪死刑を宥らる。

され。劇齋の薩摩馬の鬼界嶋蜜八の硫黄嶋偽二郎の澳の嶋中ハ
 水嶋へ配流し。是は佐渡へ流し。と定まれ。異社におきて赦されて。都に
 留りし。かくて件の配軍ハ浪速の浦へ追立られ。且順風をま。ほどは且裁
 重病の囚徒を療治せし。絶よ七日許中。一人も送わ。瘡の如。當下
 藤綱ハ長時朝臣は相諱。かく。且裁を問注所へ召せし。療治その
 效を奏する。この速。賞禄。と。沙金拾五兩を賜り。且。且裁則
 この賜。衣食調度を購求。これを劇齋に贈り遣。且。身嶋
 後。且暮の艱苦を扶。只管。願。劇齋不良。非如
 り。改を害せし。既。これ分明。今。何の恩義。改。非如

徳をりく怨は報んと欲せりとも律の場の許さる所なれば隨後の願ひ
かかると但その恩賜の金どりの劇齋は衣食調度を贈遣えと願ひしを
曩に蜜八は畧奪られ金を貰んと為るべければこの一條の許容せざる故が
隨意とて之を免許の状を賜りければ且藏は拜舞して国恩を謝し奉り
即日淀船より乗りて次の日浪速に赴けり彼件を購て之を劇齋が
舟より乃ち打ち水主へ順風をればとて出船の貝を吹立るとの浦わくと
且藏へ劇齋は對面と年来の恩を謝ししをわを期が死離別の涙を
流ぐよん劇齋は今もに慚愧後悔して回答せよはば於於船路はなれは偽言
藥中蜜八は且藏が忠心をなす就たばくもつ死不良の心を轉て先非と

悔く多かるがそむたなはつれは竟は復を解せられぬ配所は赴き
劇齋が不義中へ富巷路の富るも金銭器材はばさる家も庫も毀れて官へ
取られ由守ある傭人小のあが禁獄せられ日ありや捨て置も去られれば只此を
守る程この日やをく埒あはれぬが宿所をかゝるもかりし程は且藏が忠
信の事の趣を多く京浪速は風聞して嘆賞愛敬せざるはあけ富るものへ資
財を贈り病者へ試よその療治を乞ける難病劇疾立地は瘥らばといふ
とやあせりてその医療日よあはれぬは京浪速は往來せしものあり
その居宅と下は寡慾ありと施を好し餘あれば必散く貪りものを聚
けりかゝるその次の年北四月の比鎌倉の將軍宗尊親王の北比方久しく

徳をりく怨は報んと欲せりとも律の場の許さる所なれば隨後の願ひ
かかると但その恩賜の金どりの劇齋は衣食調度を贈遣えと願ひしを
曩に蜜八は畧奪られ金を貰んと為るべければこの一條の許容せざる故が
隨意とて之を免許の状を賜りければ且藏は拜舞して国恩を謝し奉り
即日淀船より乗りて次の日浪速に赴けり彼件を購て之を劇齋が
舟より乃ち打ち水主へ順風をればとて出船の貝を吹立るとの浦わくと
且藏へ劇齋は對面と年来の恩を謝ししをわを期が死離別の涙を
流ぐよん劇齋は今もに慚愧後悔して回答せよはば於於船路はなれは偽言
藥中蜜八は且藏が忠心をなす就たばくもつ死不良の心を轉て先非と

不例ふれいよりしくく日ひみく重おもしむるあまの臨りん月げつへ近ちかつ死しを御ご産う心しんをとなを
 在あ鎌倉かまがらの医官い官へまゝま京きやうより名な医いと召よ下くだしくあつて医案いあんと献けんせ又また有あ驗げんの
 高僧かうそうと宮中みやちゆうは屈請くつせいして加持かぢせを更さらども絶たく驗げんへあつてりかりし程ほどは北きたの方かた
 一夕いつしやの夢ゆめは年来ねんらい信しんしめあつて清水寺しみずでらの觀世音くわんせいおん忽然くつぜんと枕まくらより立たて死し身の病びやう著あ甚しん危き
 ちかく熊膽くまたんを用もちひぬ然しからぬ全快ぜんかいと示しせぬあつて三夜さんやも及およべり既すでわく
 件けんの靈夢れいむと外様げいさうは披露ひろうありぬれ執權しやくけん時頼ときより朝臣あその沙汰さたとしく典藥てんやう
 尚藥しやうやうの旨しめと傳つたへちかく熊膽くまたん劑ざいの丸茶わんぢやとしくあつて命いのちせしる医官い官ホ
 承うりく眉まゆと擗ひり北きたの方かたは病惱びやうなうの素もとあり熊膽くまたんの症しやうよりあつたあつたも
 台たい余あれ重おもいぬれがとく熊參丸くまさんわんとあつて七しち日にちも及およべりれ將まさらぬ效きやくあつたあつた
 台たい余あれ重おもいぬれがとく熊參丸くまさんわんとあつて七しち日にちも及およべりれ將まさらぬ效きやくあつたあつた

より医官い官ホほれがとく熊膽くまたん丸わん症しやうは相あ応おうしく今いま早はや熊くまの胆たんと除去てきぞと
 乞こ程ほどは北きたの方かたは初はつめとく靈夢れいむ亦また復たがひ三さんび及およべりれれままああつたああつた時頼ときより
 智ちの親族しんぞく評定衆へうていしゆうと召聚よびあつ合あひの意見いけんと問とれは皆みな惘然わうぜんと辨わとやこの
 次つぎ青砥藤綱せいぢとうきやうの畿内きいの勘察かんさつ事じ保たもて鎌倉かまがらへ還かへりてその末席まつせきは侍しやくりて
 時頼ときよりれとえくく其許そのこよりあつて考かんがわぬと向むかは藤綱とうきやう
 額ぬくとつ死し見み訊きは愚意ぐいを述のべぬ彼御かのご靈夢れいむの熊膽くまたん丸わん茶ぢや物のものあつたあつた
 熊野くまの且藏ぢざうと呼よび醫師いし今いま京きやう撰せんの間まはあり渠そのの性忠しやうぢゆう美み厚あつく去歲こぞの
 冬都ふゆと苗様なぶさうはあつてり下官げ官則すなはち六波羅殿ろくはらでんより代かりあつて渠そのが冤枉えんかうと
 釋しやくよりあつてり人ひとの療治りやうぢは經驗けいげんあつてり大おほくあつたあつたをを知しれりその

姓名をも推し恐く示現の熊胆ハ熊野且蔵くまのしんざうが御下し
その湯液をそまふせあつたとき時頼の譏は任々六波羅むつろ首とて
往返夜と日ひ継つぎりたれ且蔵ハ六波羅より快輪くわいりんに乗せしめり
ととき時頼これと宮中みやちゆうに召入めいじりれ診脈しんみやくのち地味ぢみを調呈てうていせしと命めいせし且蔵
あひひ免命めんめいは畏おそり之これ只顧ただみし辞ことばしもうせしと許ゆるさるわが已いまと
ぬぞ医業いげふと迷まよひ湯劑とうざいと調進てうしんし程ほどは只一貼ただひとてめり北きたの方かたは病悩びやうなうと
ぬひ三日さんじつの病床びやうとこを望のぞみ七日しちじつのかた本復ほんふくあり且幸またさいあり御胎ごたう
恙やまあり諸司しよしハし医官い官ホも免命めんめいの国くにと称なづけり況いはして將軍せんぐん執権しやくけんの
免命めんめいハ大々たいた終しまり且蔵しんざうハ三百貫さんひやくくわんの莊園しやうえんと賜たまひ侍医じやくい召加めいえ北きたの方かた

御安産ごあんさん也なり日夜にちや営えい中ちゆうは命めいせしと命めいせしれ休息きゅうし所ところを宛行あてをりし藤綱ふじづなも
免命めんめいの賞しょうと物ものあつた賜たまひけり當下たうげ且蔵しんざうハ恩命おんめいを謝あやまりし希ねがひ
あつた某短たつた才さい中ちゆうはし寵恩ちゆうおんを被かるは原是げんぜい劇齋げくさいが傳授でんじゆされり
あつた吾師ごし劇齋げくさいハ罪つみありて配流はいりゆうされ今いま鬼東きとう鳴なり在あり願ねがふハ恩賜おんめいの
莊園しやうえんと返かへり且蔵しんざうハ此度このたびの恩賞おんしょうハ劇齋げくさいホも免命めんめいせし望足のぞみり之これハ
あつた中ちゆうは時頼ときたう嘆賞たんしょう侍しやく々々於お時ときは遇あはさる功こうは誇こほらる已いまと虚うそとそ
初はつと忘れわすれざり仁人ににんの心こころ賜たまひ所ところの莊園しやうえんハその終受しゆうじゆされ北きたの方かたの安産あんさんの
免命めんめいとて免命めんめいの赦あやまりし首くびとてあつた諭あやまり且蔵しんざうを退あげ
その後六波羅むつろハ赦あやまりし薩摩さつま河かの流人りゆうにん劇齋げくさいホも放還はうたうせしと

御教書と遣さる有然程は五月はなほその望の日は北の方御産の氣
つせぬひは若君誕生ありけり免湯液の形のごく熊野且蔵うけありと始終
調進ありし御母子共は健子をゆく肥させあはれ將軍の元歡びに
執推時頼朝臣の為は北の方の養女若君の外孫且蔵が忠勤と賞せしが
あはれびと猛法橋を補せしを禄を増し第と賜り且宣も且蔵の
心端く初端はよりくその技亦端しその三の端は神明仏陀の
擁護ありえ彼裸體の厄を難くこの福を迎へり今あり且蔵と更り端三
法橋と称ししを御多ふ有は栄光あり知らぬも驚嘆といは教と
いぬやかれは端三の任重く務もそのかりけれ入て吾師を迎んとその

六月の七日あり心利す兩個の家僕を浪速津に遣せしは七月の七日は
信あり劇齋偽二郎藥中蜜ハホ同帆く帰洛の船中日向国細嶋の
澳の山雞瀬と名離やく暴風よあかく船覆り忽地魚腹に葬らる
但その迎の官人と水主揖取ホハ三枚は携り品は政登と僅は
過船の助をたき恙ありしその趣京鎌倉よゆその端三浪速まで
遣しえけり西僕ハいづり来り来り端三ハかくまひ心を盡せし甲
斐もろく忽地望と失く愁嘆氣色は頭れハ藤綱これを慰む法橋
さの歎かせを劇齋偽二郎四個の流人ホの程もかく救はわひあつ中国
あはれぬ著る破船はよりく送るものあり西の水屑とありしは是



業因の致は所の中もはるるを壁に偽二郎が夢物語は鐵觀音の頭顱俗髪
 ぬくとの軀も死にた己が面も肖らるとるも忽地は水もきて流れて迹あり
 してひびき今更かひあはるるは仏の首の軀も死に彼も死刑を宥むる前象と
 りていふかして水もあつる遠地荒磯は流るる北あり又迹ありありとて救ふ
 あひあつる帰路せだ入水して七泊北ありと偽二郎のまが劇斎蜜八茶中
 小も同惡の報と脱れば且その水も終と取方山雞の瀬も名詮自性影も弱
 海嶺と長く一まあつるを釋諭せ端三言下も曉りて鬱胸を披くもの
 う又つくぐとあやう今生の惡報の現入カもて極ひて緣故を案じようか
 師の非命も終り一はる兄湯治の餘殃と攀する浴當と甲んの崇ぶべし。まが後の

世もいふして三熱の苦難と脱るるやわん。師の菩提の捷徑はその源流と
 鎮るよおとあつと深念とこれより月の十八日は法師も布施と普門品と誦せ
 又その秋は于蘭盆は浴當も墳墓ある何某の院の住持と導師とと浴當親子交平
 夫婦湯治劇斎が為は大地饑鬼の好意と與れと秋毎も念ひ法廷三年も及ぶ
 とた一々端三が夢は一個の聲女端然とと枕方は立對ひん身が年来の功德も
 吾儕もなぞ佛果とぬり。これば身が父母のそも有縁の人と漏るるも皆天堂の
 登りたかかをもをわが子孫の家門繁昌疑ひなくと告ぐ夫も明とひ死此紫雲
 ろも兼て西と投てを飛去る端三覺く歡びも堪ば次の日米錢夥散くを兒も
 取るる長旅も寔れる老弱二人の女僧施の場もより来るととんれば是別人

三月版古文卷三

かゝるは後達一々青砥河の賜とて藤綱が家の病用ハ駕と疎むく遺
るるも又その謝物と受さるるもこれなると在鎌倉の武士医官増保と未
の妻よりその中は二階堂入道の女見元賢とゆえ一とこれと擊りて三男
二女と奉りその子ども成長の後長男は家業と嗣しく且三と名告らせ
身ハ致仕隠居しく水嶋居士と號しなり。山鳥の水は濁る蔵の意ハ
亦後水嶋居士端三ハひより鎌倉を辭し去り且く都を杖と駐り蓮華院ハ
劇齋ハ墓石を立て祠料を寄せ紀の藤白ハ起死ハひりしれ物と贈
里ハ厚く酬やく劇齋が送田と向む別ハ莊園と購求め名草が苦授
所と其の親族の子ハ分與へく劇齋が名迹と文とを謀り程よと還首日を

累く死病を濟し貧窮を賑ひ終ハ舊里熊野ハ還りて父祖親族の墓を
祀り多し里の貧人ハ施し一錢も送し貯む熊野ハ閑居しく二百餘歳とあり
しとどその子後の且三ハ鎌倉の將軍ハ仕ありて医術と多く親ハ方ハ二男三
男ハ武藝と好むるが新ハ召されたり武士ありつかりて子孫とまるといれ
繫昌ハ方ハ一夫医ハ仁術中ハ人の司命なりこの端三法橋のありと念
才ハ其の技ハ誇り勢利熱中ハ其の奔走ハ其の慶福ハ其の
附ハ其の編中の画ハ今ハ其の衣裳調度ハ其の煙管社ハ其の文ハ亦ハ其の準ハ其の四條
河原の段ハ其の他ハ其の或ハ画工の筆ハ其の作ハ其の原稿の意ハ其の後ハ其の看官ハ其の
刀筆青砥石文鴛水箴語卷之六終

御加ねは び 美艶 えん 仙女香 せんぢよこう

一色四十八孔

此の御加ねの御保十年二月の船主伊守九と云ふ人
も湯偶居の時丸山は全盛中近江や美濃と稱せし御受
奇代の妙や之功能の包紙よりくまると○十色以上を
とすといふ三世居後者自筆の扇子は御物より上は用のせいの
法を記し後者各前法好む故

調合弘所

江戸南條町三丁目
いさる本氏製

いさる本氏製

イサ

